



初めてのカメラ

折口 禾乃

始発駅の加茂を十時に発車したJRの快速は大和小泉駅を過ぎ、奈良盆地の中央を南西に向かって走っていた。停車するごとに休日を大阪で買い物や何かで過ごそうとする人が乗り込んできた。

「父さん」

「ん？」

真向かいからの声に顔を上げた。

「一番向こうの山、見える？」

文庫本を閉じて、健一の指さす方に目を向けると、昨夜からの雨が上がり、空気が澄んで遠くまで見渡せた。

「あれ、雪？」

「ああ、多分。山上ヶ岳だ。続いて奥にあるのが彌山だろう」

奈良盆地の南端に大和三山が頭を出し、後ろに吉野前衛の山々が横たわっている。更にその向こうに息子が指さした雪の被った峰が連なっていた。頂上あたりしか見えないが、紀伊山地の最高峰で古来からの霊峰だけあって、悠然として別の時間を刻んでいるように見えた。彌山がこのあたりから見えるのは冬の間か、台風などが空気の濁りを持ち去っていった時ぐらいである。冬でも見えない日の方がずっと多い。雪までがはっきりと肉眼で見えるのは珍しいと思った。

「三月なのに珍しいね」

「五月に出くわしたこともあるよ」

「釣りで？」

「ああ、沢を上り詰めていくと、頂上は真っ白だった」

健一はすごいなという顔をした。窓の外に目をやり、吉野の方角をみながら、

「悪いね」と、小声で一言呟いた。

アマゴ釣りが解禁になった三月の最初の日曜日に私を連れだしたことを言っているのだろう。私は聞こえないふりをして、大和三山、金剛葛城山、青垣の山々を健一に教えた。法隆寺駅を過ぎると、窓を北に移し京都の鷲峰山、大阪との境にある生駒山や矢田丘陵の南端の裾にある法隆寺を指さした。

「すごかったんだね」

「何が？」

「しょうとく、た、い、し」

「聖徳太子？」

私は健一が何を言っているのか、判らなかった。

「だって、ここから奈良盆地が総て見渡せるんだよ。法隆寺の五重塔に見張りを立てれば、敵が攻めてきてもすぐに分かる。明日香なら直接見通せるよ。木津や加茂でも、狼煙でも上げれば何とかかなりそうだ」

「・・・面白い発想だな」

今日のようにこれだけ遠くを見通せる日は少ないのだが、中学二年生がそんなことを考えつい

たのが面白かった。聖徳太子といえば誰でも文化的なものを思い浮かべる。なのに、健一は武人としての太子を心の中に思い描いているのだ。当時の権力闘争のまっただ中にあった彼の本質を見抜いているのだろうかと思った。

「ところで、何をかうか決めたのか？」

「うん」

「いくら持ってきた？」

「全財産」

「足りるのか？」

「大丈夫だと思う」

健一はフォックスファイアーのウィンド・ブレイカーを右手で跳ね上げながら、スリムのジーンズの後ろポケットの財布を確かめた。少し厚手のボタンダウンのシャツの上に、ベルトが十センチ程余らせてジーンズを絞めていた。三年前、東京から大阪へ越して来たときの、ベルトをだらりと垂らした腰の細さからは考えられないほど逞しくなっている。身長はまだ伸びきっていないが、がっちりした体格に変化している。

去年の秋に加茂の新興住宅地に一戸建てを求めて再度、越して来た地が水に合ったのかもしれない。地元の子どもより自然に染まった生活を満喫しているようだ。器用なもので、友達とは関西弁、家では標準語を使い分けているという。もっとも健一に言わせると、大阪と加茂では少し言葉が違って、正確には三種類らしいが、区別がつくのは彼しかいない。

妻の話では転校して直ぐに学校にとけ込んだようだが、この田舎の中学校にもいじめの問題は存在するらしく、友達の少ない者や転校生に的が向けられ、それが唯一の気がかりだということだった。

「健一、学校は面白いか？」

「まあまあかな・・・どこでも同じだよ」

健一はどう答えていいものか、ちょっと間を置いて言った。

「どういう意味だ」

「自分で面白いと思えば面白くなるし・・・その反対だってあり得るし・・・」

「謎めいた言葉だな。ところで、いじめのグループがあるって聞いたが・・・」

「人をいじめて、面白がる奴はどこにでもいるさ。東京でも大阪でもね」

「おまえは大丈夫なのか？」

健一はちょっと俯いてから、顔を上げ優しい眼で私を見た。そして窓の方を向いた。暫くしてから向き直り微笑むと、

「父さんの本棚から、時々本を借りて読んでいるんだ」

と言った。

「イナミ カズヨシって人の書いた本」

「父さんも好きだ。稲見一良。イナミ イツラと読む」

「全部読んだよ。でも、その人の本、新しく増えないね」

「去年亡くなった。肝臓を長い間煩っていたらしい」

それを聞いて、

「そう」と一言だけ呟くと、窓の外を向いてしまった。健一の目が少し潤んでいるように見えた

。

話はそこで途切れた。

列車が奈良と大阪の境を過ぎ、大和川から離れるに連れて天然の色合いから、人工色に変わっていく。ビルや住宅は連続して街を形作っているが、それらの一つ一つは自分のテリトリーをしっかりと守っていて何かを主張しているようだ。けれども、それらを個性と呼ぶにはあまりにも恥ずかしいと思った。息子に目を遣ると、外の景色に飽きたのか健一もこちらに顔を向けた。

「父さん」

健一の顔に笑顔が戻っていた。さっきの悲しい眼はどこかへしまわれたようだ。

「何だ？」

静かに言った。

「さっきの続き」

「何の話だったかな」

「いじめの・・・」

「ああ、そうだったな。いじめられたことあるのか？」

私は心の中で真顔になった。愚痴などを言うのも聞くのも嫌いな子が、そんな話をし始めるとこののが気にかかったのである。

「稲見一良の話の中にね・・・」

また、後戻りするのかと思った。

「ハックという少年が主人公の小説があって、数字の八に駆けるで八駆なんだ。話の中で、いじめっ子から一人の少年を助ける場面があるんだけど、それが格好良くてね」

「そういえば、あったけな。よく覚えていない、申し訳ないが・・・」

だが彼の小説に出てくる少年のイメージは何となく分かった。

「少年を助けたハックが今度は、いじめっ子のボスから仕返しをされる。それでハックはどうしたかという、ボスの鞆の中にトカゲを何匹も入れて、それを開けたときにそれが出てきて大騒ぎになるんだ。は虫類嫌いのボスの顔がこわばる・・・」

「それで」

私は次を促した。

「その時のハックの台詞が『今度は蛇だぞ』って、最後にもう一言『俺には構うな』」

健一は声色を変えて言った。演技じみたのが恥ずかしかったのか、少し照れ笑いをして続けた

。

「この前学校で、人をいじめる嫌な奴の下駄箱から蛇が飛び出てね。そいつは腰を抜かして、その場にへたりこんだんだ。その時は僕が捕まえてあげたんだけど、大きな青大将だった。そいつにその蛇を見せながら『マムシでなくて良かったね』って」

「それで、どうしたんだ？」

私はつい声高になってしまった。健一はまずいことを言ってしまったかな、という表情を見せた。少し間をおいて、大したことじゃないんだと取り繕うように、

「どうもないよ。それでおしまい」と、涼しい顔で答えた。

私はそれ以上聞かなかった。健一は彼なりに闘っているのだと思った。闘って負けて弱者になるのは仕方がない、最初から弱者でいるのは耐えられないのだろう。

私達は途中天王寺で乗り換え、JR難波まで行き、そこから虹の街と呼ばれている地下街を西の端から東の端まで歩いた。普通は天王寺から地下鉄に乗り換えて日本橋に行くのだろうが、なぜかこのコースを取ってしまう。

季候の良い時期は人は郊外へ行くものと思い込んでいた私は、人通りの多い日曜日の繁華街に辟易した。二人ともゆったりと歩いているつもりなのに、すぐに前に行く歩行者に突き当たってしまう。左右に分かれて追い抜いたり、前から歩行者の来ないのを見計らって縦一列になって追い越したりもした。

「日本橋に大きなカメラ屋があったかな・・・雑誌に載っていたかな？」

「大きいと言ったか・・・ 健一！いくぞ」

また一組のアベックを両側から追い抜いて、元に戻った。

「でも、何でも揃っていると聞いたじゃない」

少し心配そうな健一に

「ああ、そう言ったことがあったかな」

と返事をした。

「あるかな？ 売っていなかったら」

「あるだろう・・・ えらく心配するじゃないか。どうしてだ？」

「あまり売れそうなカメラじゃないから。この前奈良へ行ったときも見たんだけど、どこにも置いていなかったんだ。」

「大丈夫、絶対あるさ。だがな、カメラは自分の手で触って、試してみなければ判らん。何かインスピレーションみたいなものが伝わってくるんだ。『俺を使ってくれ』ってね。きっとお前の気に入るのが見つかる」

健一は黙って頷いた。

虹の街はJR難波から東西に一直線に延びていて、南北に二筋の平行して通りがあり、それぞれの両側に地下鉄の一駅分の距離の中に店が連なっている。その東端に地下鉄日本橋駅が南北に走っていて地下街をそこで遮っていた。私達は終点にある南の階段を上った。地上は日本橋一丁目の大きな交差点で、そこを南へ二十メートルほど歩いたところにTカメラがある。

「ここだ」

店の前で健一に言った。間口が二間ほどで十坪にも満たない小さな店である。店構えが予想と違ったのか、陳列を見回した後、店の奥を窺った。

「小さいけれど、沢山置いてあるね」

そう言うのと並んでいるカメラを一台ずつ目を通していった。やがて、あるカメラの前で視線が止まった。目的のものがあつたらしい。カタログや雑誌でしか見たことがなかったのだろう。もうすぐ手にとって試せるのに、実物を前にして見とれてしまっていた。

私がお店を知ったのは三年前に東京から転勤してきて間もなくの頃であった。ストロボを取り付けるアクセサリースューが壊れたので、カメラ店に行ったが、どこも取り寄せになるという

返事ばかりであった。私の持っているカメラがメジャーでないということも手伝って、大きなカメラ店でも事情は同じであった。売れるものからというのが商売の鉄則かもしれないが、小さな店ならいざ知らず、大きな構えでマッチ箱にも満たない部品を置くスペースがないというのも、おかしいと思った。ましてそのメーカーのカメラを売っているのならなおさらである。

どうしても明日必要だった。殆ど諦めていたところ、このTという店が目に残った。駄目で元々という気持ちで店の中へはいった。小さな店の割に店員が四人もいて、新品、中古を問わず、カメラ、レンズが三方の壁に造られた陳列に所狭しと並んでいるのに驚かされた。

『すみませんが』

『はい、何でしょう』

『O社のXX型のアクセサリシューありますか』

おそろおそろ訊いた。

『XX型ね』

そう言うとき後ろを向いて、棚の扉を開けてゴソゴソしたかと思うと、取り出した二センチ角の小さな箱を私に見せて、

『これですね』とことなげに言った。

私は嬉しくなった。小さな部品までも実直に値引きしてくれたのにも気をよくした。大きいだけのカメラ店に比べて、ここはカメラに関する密度がはるかに高かった。彼らのカメラに関する知識は、二、三年店頭に立っただけでベテラン顔をするような店員とはレベルが違っていた。しかも、よく知っていることを鼻にかけた嫌みもない、頑固さもない。店員と言うよりは販売の職人だった。私は一度でこの店が気に入ってしまった。

「中へ入ろう」

陳列に張り付いて動かない健一を促して、奥へ入っていった。

「梁瀬さん、お久しぶりですね。今日は新しいカメラですか」

五十過ぎの私より年上の上品そうな語り口の店員の一人がちらっと健一の方に目を遣って、挨拶した。

私は健一の肩を軽く叩いて

「息子なんだ」と紹介した。

「判りますよ。そっくりなんですから」

と言って店員はにやりとした。

「そんなに似ているか？」

健一は妻に似ている、とよく耳にするが自分に似ていると言われたのは初めてであった。

彼は私の顔を見て、

「顔じゃありませんよ。雰囲気ですよ、雰囲気。二人とも同じ格好をしていらしゃる。どこから見ても親子です。それもオレゴンのどこか片田舎のログハウスに住んでいるらしい……。でもね、お父さんの方が派手ですね。息子さんはシンプルですっきりしている。それに賢そうだ。中年の不良に、保護者の息子さんといった感じです」

そう言って笑った。

私は顔の筋肉を弛めたことを後悔した。健一は首を少しこちらに振って、上目遣いで私を見て、にやっとした。

「今日は息子が客なんだ。写真機を買うといっている。私は付き添いだ。ずっとお金を貯めていてテレビゲームを買うのだろうと思っていたら、カメラだそうだ」

「それはそれは、大事なお客さんだ。これからずっとお付き合いして貰わなくてはね。さあ、座って」

彼はにこにこして言った。他の店員もみんな微笑んでこちらを見た。健一は恥ずかしそうにして座った。緊張しているのが判る。私も横に腰掛けた。

「さて、どんなのがお目当てですか？」

健一はカメラのメーカーと機種、レンズは接写のできるものが欲しいと言った。

「マニュアルフォーカスの一眼レフか。ほう。今のオートフォーカスのカメラは人間の眼より正確ですよ。なぜこのカメラを？」

彼は優しく言った。

「父さんので試させて貰ったんだけど、勝手にピントが合って・・・」

「楽ですよ」

「でも、やっぱり自分で合わす方がいいです。それに予算のこともあるし・・・」

彼は笑顔で頷くと陳列の方へ行って、四台ほどのカメラを持って戻ってきた。

「予算は別として、ここにあるのを触ってみるといい」

そう言うと、一台ずつ特徴や機能を説明した。健一は順に写真機を手にとって、ファインダーを覗きフォーカスリングを回した。

「シャッターを切ってごらん。フィルムも巻き上げるつもりで」

「あ、はい」

健一はまずは自分の決めていた一台を手にとって、シャッターを押した。カシャッというミラーの跳ね上がる乾いた音がした。それは軽いというより、私には何か頼りなさを感じさせた。技術が発達してプラスチックのボディでも十分な強度がもてるようになったが、機械が持つ重量感、精巧さが損なわれているように感じられた。

健一は一台ずつ試していった。どのカメラも軽さが伝わってきた。最後に試したのが、ニコンのFM2というカメラであった。ダイカストのボディは健一の手にはずっしりと重みを伝えていた。ミラーの音も気のせいもしっかり跳ね上がっては元に戻っていく感じがした。ミラーのはね上がりは振動の少ないのがよいのだが、あまりにも軽い音は写真を撮るという行為が希薄になっていくのではないかと思った。

「どうですか」

彼は尋ねた。健一は困ったような顔をして、最後に試したニコンを手を持ったまま、他のカメラをじっと眺めた。

「よく判らないです」

そう言うと私の方を見た。カメラを買うのでついてきてくれ、と初めて健一に頼りにされたのに、口を出して良いのか迷った。

「健一、一台ずつ納得するまで試して見る。写真機から何か伝わってこないか？」

私はそう言うしかなかった。

健一は手に持っていたのを手始めに、同じことを繰り返した。そして、最後にもう一度ニコンを取り上げてファインダーを覗き、シャッターを切った。その音を十分楽しんだのか、ファインダーから目を離すと、ゆっくりと巻き上げレバーを操作してカメラを膝の上におろした。左手でフォーカスリングを持ち、右手の親指は巻き上げレバーに、人差し指をシャッターボタンに乗せたままカメラを眺めている。精密機械の肌触りを名残惜しんでいるかのようだ。自分の予算では買えないのが分かっているからであろう。

健一の頭が僅かに動いて、自分自身に向かって頷いたように見えた。そしてニコンを丁寧に元に戻すと、前から買おうと決めていたカメラを手を取った。

店員は健一が最後に置いたカメラを撫でながら私の方を見た。その眼は（不足分を出してあげるんでしょ）と催促しているように見えた。私は彼に何のサインも返さずに、机の上にあるカメラに目を落とした。

私が初めて一眼レフを買ったのは、健一と同じ中学二年生の時であった。父はその方面には全く興味を示す人ではなかったので、母方の祖父に連れて貰って、カメラを買いに行った。私も健一と同じことをした経験があるのだ。その一台がニコmartだった。中学二年生の小さい手にずっしりとのしかかって、今健一が手にしているものよりはるかに重いカメラだった。

当時、私が持っていたお金では、ニコmartが買えなかった。祖父は足りない分を出そうとしたが断った。私は他社の一眼レフを手に入れることになった。それでも、精密機械の代表であるカメラを自分の物にした感激は大変なものであった。

年を経て、私はニコンのカメラを買う機会を得た。だが、あの時の心の高ぶりはやってこなかった。

私は健一に初めて写真機を自分のものにするときの、あの何ともいえない興奮を自分の納得するカメラで味あわせてやりたいと感じた。だが健一も私と同じようにお金の申し出を断るであろう。いや必ず断るに違いないと思った。

「梁瀬さん」

急に声をかけられて店員の方に目を向けると、ニコンを触りながら私を睨んでいる。

「確か三年前、新しいカメラを買われたときに、下取りに出したカメラとレンズの中にニッコールのマクロレンズは入れませんでしたよね。これだけは残しておくとか・・・ じゃなかったですかね」

突飛な話には私は困った顔をしたが、彼は私の反応を無視して

「ほら、五五ミリでF 2・8（えふ、に一はち）のマイクロニッコール・・・」と続けた。

私は彼が何が言いたいのか理解した。

「ああ、あれね。どこかに仕舞ってあるはずだ」

私の返事はぎこちなかった。

「健一君。総てが新品でないと嫌なら別だが、お父さんがレンズを一本持っているはずだ。ただし、ニッコールのレンズだからこっちのカメラしか使えない」と言って、ニコンのカメラを指さした。

「君が欲しいと言ったレンズより、お父さんのが描写はいいかもしれない。でも、今はどのカメ

ラも優劣はつけられないほどよく写る。使う人との相性が大切だと思う。君が好きになったカメラが一番いいカメラになるだろう。新しいので揃えてもいいし、それは君が決めることであって、私じゃない」

健一は頷くと二つのカメラを見比べた。そして私の方を向いて、

「父さん、レンズ貸してくれる？」と言った。

「ああ、お前にプレゼントしてやるよ。ただし、今度の誕生日は何もしないからな」

健一の口が真一文字に結ばれ、それがゆっくり崩れて白い歯が見えた。

「こっちにします。ボディだけでも買えますか？」

「はい、もちろん。これからも鼻屑にしてくださいよ」

代金を支払い終えて、健一は紙袋に入ったカメラを手にした。

「これで良いんだな？」

私の問いに笑顔が返ってきた。

「健一、父さんはちょっと見たいカメラがある。店も混んできたから、先に出て昼を注文しておいてくれないか」

そう言うと、私は通りを隔てた黒門市場の中にある一軒のうどん屋を教えた。健一は紙袋の紐を持たずに二つ折りにすると、それを小脇に抱えて席を立ち、礼をして出口へ向かった。途中で誰かに呼び止められたのか、急に立ち止まると入り口にある陳列に目を遣った。そこには中古のカメラが並んでいる。しばらくして、健一は私たちの方に体を向けた。何があったのか私が声を掛けようとする、と、「うどんが伸びないうちにね」と言って体を反転させた。

「どうなることかと思った」

苦笑いをする私に向かって

「声がうわずってましたよ」と言って笑った。そして後ろの戸棚から紙袋を出して、一本のレンズを取り出した。

「昔からのお客さんのもので必要なくなりました。使い込んでありますが、確かな品物です。うちも商売ですから、買う人がいれば誰であろうと売るのは当たり前なんですが、このレンズは確かな人に使って貰いたかったんです。これをお願いして構いませんか」

「もちろん。有り難う、助かったよ」

「こちらこそ。息子さんは賢そうだ。そのレンズもいい人に巡り会って幸せだと思います」

私は支払いを済ませて、それをーフコートのポケットにつっこんだ。店を出るとき、健一が立ち止まったウィンドウを覗き込んだ。そこには私が三年前に下取りに出したのと同じ型のカメラがあった。